

「親子のこころの諸問題に関する研究」

総括研究報告

主任研究者 有馬正高

急性疾患による小児の死亡率が激減する中で、慢性疾患の比重が増し、同時に、心理的不安定や行動障害に起因する問題が注目を浴びるようになった。慢性疾患の患児をもつ親は、時間的、経済的、社会的な制約を受け心理的にも不安定となりやすく、それが、子供の心身両面にも投影され、子供の疾患の経過や発育にも種々の影響を与えることがある。また、親の不安定な心理が長時間持続することによって、育児や自然の愛情の表現に偏りを生じ、本来は健康に育つべき小児に種々の精神的、身体的問題をひきおこすこともある。その最も端的な現象として、虐待による身体的損傷や、愛情剥奪による心身発達の停滞を上げることができる。

小児の健康に関係する因子の中で、家庭環境、特に親子関係の重要性はこれまでも多くの人によって指摘されて来た。しかし、社会環境や疾病構造の変化に伴い、その問題点も時代とともに変化すると考えられる。

今年度は、「親子のこころの諸問題に関する研究」という課題に対して3つの側面から分担研究班を組織することになった。

1. 学習障害は、子供の脳の部分的な機能障害に原因があり、期待されるような学習効果が上がらない状態と考えられ、学校教育において、近年特に注目されている領域である。幼児期には看過されるか軽度な障害と見られがちであるにかかわらず、顕在化するとともに周囲の焦りをひき起こし、さらに、小児自身もその中で不安となって二次的な行動、適応の障害を生じやすい。本分担研究班においては、教育界や家族団体などの活動や意識を念頭におきつつ、より専門的な視点に立って概念の整理と診断上の問題について明らかにすることにした。これは、本人への対応や母子保健の行政に役立てるためには基本的な問題点を明らかにしておく必要があるという考えに基づいている。
2. 小児心身症は、身体的な問題が前面に出るので一般の身体疾患として小児の診療で取り扱うことが多いが、その発症や経過に心理的因子が強く関係していると心身両面からの対応を考え実行しないと慢性化することが少なくない。さらに、身体症状を初発として登校拒否などに移行する例もあるので行動上の問題の発症を予見する手掛かりにもなり得る。本年度は、対象、頻度、治療、予防など母子保健の一環として取り組むときに必要な重点項目を明らかにすることを目標におき、医療機関や保健所などにおける診療実態と長期経過についての資料をまとめることに重点を置いた。
3. 小児虐待は、前2者に比して親の心理、行動が明らかに常態からはずれ、直接的には親の問題である。しかし、その背景には、子供自身の発達障害などが引き金となって、その対応に親が適応できない状態にいたったと思われる例が高率に認められる。このような面において、学

習障害や心身症にも虐待と無関係ではない側面をもっている。被虐待児については、過去数年来、全国的規模でその実態や背景因子についての分析が行われてきたが、本年度は特に行政的対策について提言が行えるよう計画を立てることにした。

各分担研究の詳細については、それぞれの研究報告及び分担研究者の総括にまとめられているが、今後の研究と対策の方向を示し得たのではないかと考える。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



急性疾患による小児の死亡率が激減する中で、慢性疾患の比重が増し、同時に、心理的不安定や行動障害に起因する問題が注目を浴びるようになった。慢性疾患の患児をもつ親は、時間的、経済的、社会的な制約を受け心理的にも不安定となりやすく、それが、子供の心身両面にも投影され、子供の疾患の経過や発育にも種々の影響を与えることがある。また、親の不安定な心理が長時間持続することによって、育児や自然の愛情の表現に偏りを生じ、本来は健康に育つべき小児に種々の精神的、身体的問題をひきおこすこともある。その最も端的な現象として、虐待による身体的損傷や、愛情剥奪による心身発達の停滞を上げることができる。

小児の健康に関係する因子の中で、家庭環境、特に親子関係の重要性はこれまでも多くの人によって指摘されて来た。しかし、社会環境や疾病構造の変化に伴い、その問題点も時代とともに変化すると考えられる。